



# 故郷

学びナビ

## 「私」という視点

### 「私」から見える世界

これまで皆さんは、語り手の視点や語り方に着目してきました。ここでは、語り手が、ある登場人物の視点から「私は」「僕は」と語る場合について考えましょう。

僕は悪漢だということに決まってしまう、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのよう、冷然と、正義をたてに、侮る<sup>あなご</sup>ように、僕の前に立っていた。彼は罵りさえしなかった。ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

(ヘルマン・ヘッセ 高橋健二訳『少年の日の思い出』)

この文章は、「僕」の視点から語られています。「僕」から見た「エーミール」であり、「エーミール」が「僕」を本当に軽蔑していたのかわかりません。

語り手が、ある登場人物の視点から語る場合、その登場人物から見た世界や他者を語るようになります。そのため、他者の言葉や行動の理由や意味は、他者の言葉として語られないかぎりわかりません。一方で、語り手が「彼は」「メロスは」と登場人物から距離をとって語る場合、複数の登場人物の視点から語ることが可能になるため、他者の視点から見た世界も語られます。

### 目標

- 理解や表現のために必要な語句の量を増やし、話や文章の中で使って語彙を豊かにする。
- 語りに着目しながら読み、人間や社会、自然についての自分の意見をもつ。

文章の種類／立ってくる春・なぜ物語が必要なのか  
記号／私

### 「私」という視点

「私は」「僕は」  
語り手が、あ  
る登場人物の  
視点から語る  
場合。

登場人物(私)

語り手

語り手が、登  
場人物と  
距離をと  
る場合。

語り手

「彼は」  
「メロスは」

登場人物

登場人物

登場人物

このように、語り手の視点の違いは、世界や他者の見え方の違いとなるのです。『故郷』の「私」と「閩土」が再会した場面で、「閩土」が幼なじみである「私」を「旦那様！」と呼びます。「私」は「厚い壁」を感じますが、「閩土」の発言の意図や気持ちはわかりません。「私」の視点から直接語ることはできないのです。だからこそ、「閩土」や「楊おばさん」のように、「私」にとって他者である人物の視点からも読むことが大切です。

「私」は「私」によって創られる

語り手が、登場人物の視点から、登場人物自身のことを語る場合、自身のことを語るのだから全て語られたとおりとはいえるでしょうか。例えば、「私はその時、悲しかった。」の「私」は、過去の「その時」に「悲しい」と感じていた、過去の「私」です。そして、「その時」と言っているのは、この文を書いている時点にいる現在の「私」です。現在の「私」の気持ちや状況によって、過去の「私」の語られ方も違ってきます。語られる「私」は、語る「私」によって創られるのです。

『故郷』の冒頭で、「私」は記憶の中の故郷と目の前の故郷を全く違うものだと感じ、その理由を「そう感じるのには、自分の心境が変わっただけだ。」と考えます。現在の「私」の心境が、過去の「私」にとっての美しい故郷を揺さぶります。このように、語る「私」と語られる「私」を分けて捉えることで、現在と過去の「私」を重ね合わせながら作品を読んでいくことができます。

20 . . . . . 15 . . . . . 10 . . . . . 5 . . . . .



- 現在の「私」と過去の「私」が、「故郷」をそれぞれどのように捉えているのかに注意して読んでみよう。
- 「閩土」と「楊おばさん」がどのように変わったかをまとめてみよう。

↓ P 197  
みちしるべ 2 3



# 故郷

魯 ろ  
ル ル  
迅 じん  
シ シ

竹内好 たけうちよしみ 訳

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、私は帰った。

もう真冬の候であった。そのうえ故郷へ近づくにつれて、空模様は怪しくなり、冷たい風がヒューヒュー音をたてて、船の中まで吹き込んできた。苦とまの隙間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。覚えせきりず寂寥ようの感が胸にこみあげた。

ああ、これが二十年来、片時も忘れることのなかった故郷であろうか。

私の覚えている故郷は、まるでこんなふうではなかった。私の故郷は、もつとずっとよかつた。その美しさを思い浮かべ、その長所を言葉に表そうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。やはりこんなふうだったかもしれないという気がしてくる。そこで私は、こう自分に言い聞かせた。もともと故郷はこんなふうなのだ——進歩もないかわりに、

10

5

二千里の果て

ここでは、遠い距離の意味。今の中国の一里は約五百メートル。

苦

すげ・かやなどをむしろのように編み、小舟や小屋などを覆うもの。

意 活気

類 片時も

類 長所

私を感じるような寂寥もありはしない。そう感じるのは、自分の心境が変わっただけだ。なぜなら、今度の帰郷は決して楽しいものではないのだから。

今度は、故郷に別れを告げに来たのである。私たちが長いこと一族で住んでいた古い家は、今はもう他人の持ち物になってしまった。明け渡しあけわたしの期限は今年いっぱいである。どうしても旧暦の正月の前に、住み慣れた古い家に別れ、なじみ深い故郷をあとにして、私が今暮らしを立てている異郷の地へ引越さねばならない。

明くる日の朝早く、私はわが家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草のやれ茎くきが、おりからの風になびいて、この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説き明かし顔である。一緒に住んでいた親戚たちは、もう引越してしまったあとらしく、ひっそり閑かんとしている。自宅の庭先まで来てみると、母はもう迎えに出ていた。あとから八歳になる甥おいの宏児ほんもとび出した。

母は機嫌よかったが、さすがにやるせない表情は隠しきれなかった。私を座らせ、休ませ、茶をついでくれなどして、すぐ引越しの話はもち出さない。宏児は、私とは初対面なので、離れた所に立って、じっと私の方を見つめていた。

だが、とうとう引越しの話になった。私は、あちらの家はもう借りてあること、家具も少しは買ったこと、あとは家にある道具類をみんな売り払って、その金で買ったせばよいこと、などを話した。母もそれに賛成した。そして、荷造りもほぼ終わったこと、かさばる道具類は半分ほど処分したが、よい値にならなかったことなどを話した。

「一、二日休んだら、親戚回りをしてね、そのうえでたつとしよう。」と母は言った。

15

10

5

やれ茎

枯れてしなびた茎。

▼ 茎

▼ 閑

意 心境

意 帰郷

意 説き明かし顔

意 ひっそり閑

意 やるせない

「ええ。」

「それから、閩土<sup>ルント</sup>ね。あれが、いつも家へ来るたびに、おまえのうわさをしては、しきりに会いたがっていましたよ。おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、今に来るかもしれない。」

この時突然、私の脳裏<sup>のうり</sup>に不思議な画面が繰り広げられた——紺碧<sup>こんぺき</sup>の空に金色の丸い月がかかっている。その下は海辺の砂地で、見渡す限り緑の西瓜<sup>すいか</sup>が植わっている。そのまん中に十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺叉<sup>さすまた</sup>を手にして立っている。そして一匹の「獠<sup>チヤ</sup>」を目がけて、ヤツとばかり突く。すると「獠」は、ひらりと身をかかわして、彼の股<sup>また</sup>をくぐって逃げてしまう。

この少年が閩土である。彼と知り合った時、私もまだ十歳そこそこだった。もう三十年近い昔のことである。その頃は、父もまだ生きていたし、家の暮らし向きも楽で、私は坊ちゃん<sup>ぼっちゃん</sup>でいられた。ちょうどその年は、わが家が大祭の当番にあたっていた。この祭りの当番というのが、三十何年めにただ一回順番が回ってくるとかで、ごく大切な行事だった。正月に、祖先の像を祭るのである。さまざまの供物<sup>くもつ</sup>をささげ、祭器もよく吟味するし、参詣<sup>さんげい</sup>の人も多かったのだ、祭器をとられぬように番をする必要があった。私の家には「忙月<sup>マシユエ</sup>」が一人いるだけである。(私の郷里では、雇<sup>やと</sup>い人は三種類ある。年間通して決まった家で働くのが「長年<sup>チヤンネン</sup>」、日決めて働くのが「短工<sup>トアンクン</sup>」、自分でも耕作するかたわら、年末や節季や年貢集<sup>ねんぐ</sup>めの時などに、決まった家へ来て働くのが「忙月」と呼ばれた。) 一人では手が足りぬので、彼は自分の息子の閩土に

15

10

5

▼紺

刺叉

長い木製の柄の先に、二股に分かれた鉄製の円弧状の棒をつけた武器。

あなぐまに似た動物で、この字は魯迅の造字。

▼股

▼雇

盆・暮れ、または各節句前の勘定期。

意 脳裏

意 紺碧

意 ……をかわす

意 吟味

祭器の番をさせたいが、と私の父に申し出た。

父はそれを許した。私もうれしかった。というのは、かねて閩土という名は耳にしていたし、同じ年頃なこと、また閩月の生まれで、五行の土が欠けているので父親が閩土と名づけたことも承知していたから。彼はわなをかけて小鳥を捕るのがうまかった。

それからというもの、来る日も来る日も新年が待ち遠しかった。新年になれば閩土がやってくる。待ちに待った年末になり、ある日のこと、母が私に、閩土が来たと知らせてくれた。とんでいってみると、彼は台所にいた。艶のいい丸顔で、小さな毛織りの帽子をかぶり、キラキラ光る銀の首輪をはめていた。それは父親の溺愛ぶりを示すもので、どうか息子が死なないよ、うにと神仏に願をかけて、その首輪でつなぎ止めてあるのだ。彼は人見知りだったが、私にだけは平気で、そばに誰もいないとよく口をきいた。半日もせずに私たちは仲よくなった。

その時何をしゃべったかは、覚えていない。ただ閩土が、城内へ来ていろいろ珍しいものを見たといつて、はしゃいでいたことだけは記憶に残っている。

明くる日、鳥を捕ってくれと頼むと、彼は、

「だめだよ。大雪が降ってからでなきゃ。おいらとこ、砂地に雪が降るだろ。そうしたら雪をかいて、少し空き地をこしらえるんだ。それから、大きな籠を持ってきて、短いつつかえ棒をかって、くずもみをまくんだ。そうすると、小鳥が来て食うから、その時遠くの方から、棒に結わえてある縄を引っばるんだ。そうすると、みんな籠から逃げられないんだ。なんだっていいぞ。稲鶏だの、角鶏だの、鳩だの、藍背だの……。」

五行の土が欠けている

生まれた年・月・日・時の四つに干支をあてたものを「八字」という。

閩土の「八字」には、五行（木・火・土・金・水）の土に属する干支が欠けていることを表す。

五行は中国の学説で、万物組成の元素。↓ P 314へ

▼艶

▼帽

城内

昔、中国では、盗賊や外敵を防ぐために、町の周囲を城壁のような高い塀で囲っていた。それで、町のことを城内といつたのである。

稲鶏・角鶏・藍背

いずれも鳥の名であるが、その土地独特の呼び方なので、なんの鳥かは不明。

意 人見知り

意 はしゃぐ

15

10

5

それからは雪の降るのが待ち遠しくなった。

閩土ミントはまた言うのだ。

「今は寒いけどな、夏になったら、おいらとこへ来るといいや。おいら、昼間は海へ貝殻かいがら拾いに行くんだ。赤いのも、青いのも、なんでもあるよ。『鬼おどし』もあるし、『観音様の手』もあるよ。晩には父ちゃんと西瓜すいかの番に行くのさ。おまえも来いよ。」

「どろぼうの番？」

「そうじゃない。通りがかりの人が、喉のどが渴かわいて西瓜を取って食ったって、そんなの、おいらとこじゃどろぼうなんて思やしない。番するのは、あなぐまや、はりねずみや、獠チヤさ。月のある晩に、いいかい、ガリガリって音がしたら、獠が西瓜をかじってるんだ。そうしたら手に刺さ又またを持って、忍び寄って……。」

その時私はその「獠」というのがどんなものか、見当もつかなかった——今でも見当はつかない——が、ただなんとなく、小犬のような、そして獠どうもうな動物だという感じがした。

「かみつかない？」

「刺又があるじゃないか。忍び寄って、獠を見つけたら突くのさ。あんちくしょう、りこうだから、こつちへ走ってくるよ。そうして股をくぐって逃げてしまふよ。なにしろ毛が油みたいに滑つくくて……。」

こんなにたくさん珍しいことがあるうなど、それまで私は思ってもみなかった。海には、そのような五色の貝殻があるものなのか。西瓜には、こんな危険な経歴があるものなのか。私は

15

10

5

### ▼ 殻

鬼おどし・観音様の手  
その土地の貝の名前。  
正式名称は不明。

### ▼ 渴

### 意 獠 猛

西瓜といえ、果物屋に売っているものとばかり思っていた。

「おいらとこの砂地では、高潮の時分になると『跳ね魚』<sup>は</sup>がいっぱい跳ねるよ。みんなかえるみたいな足が二本あって……。」

ああ、閩土の心は神秘の宝庫で、私の遊び仲間とは大違いだ。こんなことは私の友達は何も知ってはいない。閩土が海辺にいる時、彼らは私と同様、高い塀<sup>へい</sup>に囲まれた中庭から四角な空を眺めているだけなのだ。

惜しくも正月は過ぎて、閩土は家へ帰らねばならなかった。別れがつかなくて、私は声をあげて泣いた。閩土も台所の隅に隠れて、嫌がって泣いていたが、とうとう父親に連れてゆかれた。そのあと、彼は父親にことづけて、貝殻を一包みと、美しい鳥の羽を何本か届けてくれた。私も一、二度何か贈り物<sup>わく</sup>をしたが、それきり顔を合わす機会はなかった。

今、母の口から彼の名が出たので、この子どもの頃の思い出が、電光のように一挙によみがえり、私はやっと美しい故郷を見た思いがした。私はすぐこう答えた。

「そりゃいいな。で——今、どんな？ ……」

「どんなって……やっぱり、楽ではないようだが……。」そう答えて母は、戸外へ目をやった。「あの連中、また来ている。道具を買うという口実で、その辺にあるものを勝手に持っていくのさ。ちょっと見てくるからね。」

母は立ち上がって出ていった。外では、数人の女の音がしていた。私は宏児<sup>ホンル</sup>をこちらへ呼んで、話し相手になってやった。字は書ける？ よそへ行くの、うれしい？ などなど。

▼ 跳

▼ 塀

▼ 贈

窓  
口実

「汽車に乗ってゆくのか？」

「汽車に乗ってゆくんだよ。」

「お船は？」

「初めに、お船に乗って……。」

「まあまあ、こんなになって、ひげをこんなに生やして。」不意にかん高い声が響いた。

びっくりして頭を上げてみると、私の前には、頬骨の出た、唇の薄い、五十がらみの女が立っていた。両手を腰にあてがい、スカートをはかないズボン姿で足を開いて立ったところは、まるで製図用の脚の細いコンパスそっくりだった。

私はドキンとした。

「忘れたかね？ よくだっこしてあげたものだが。」

ますますドキンとした。幸い、母が現れて口添えしてくれた。

「長いこと家にいなかったから、見忘れてしまつてね。おまえ、覚えているだろ。」と私に向かつて、「ほら、筋向かいの楊おばさん……豆腐屋の。」

そうそう、思い出した。そういえば子ども頃の、筋向かいの豆腐屋に、楊おばさんという人が一日中座っていて、「豆腐屋小町」と呼ばれていたつけ。しかし、その人なら白粉を塗っていたし、頬骨もこんなに出ていないし、唇もこんなに薄くはなかったはずだ。それに一日中座っていたのだから、こんなコンパスのような姿勢は、見ようにも見られなかった。その頃うわさでは、彼女のおかげで豆腐屋は商売繁盛だとされた。たぶん年齢のせいだろうか、私は

15

10

5

## ▼脚

### 豆腐屋小町

小町は小野小町おののこまち(P132参照)のことで、小野小町が美人であったといわれるところから、美しい娘のことを「小町」という。原文は「豆腐西施」。西施は、古代中国の呉越の争いに登場する美女。

## ▼腐

## ▼繁

意 あてがう

意 口添え

そういうことにさっぱり関心がなかった。そのため見忘れてしまったのである。ところがコンパスのほうでは、それがいかにも不服らしく、蔑むような表情を見せた。まるでフランス人のくせにナポレオンを知らず、アメリカ人のくせにワシントンを知らぬのを嘲るといった調子で、冷笑を浮かべながら、

「忘れたのかい？ なにしろ身分のあるおかたは目が上を向いているからね……。」

「そんなわけじゃないよ……僕は……。私はどきまぎして、立ち上がった。」

「それならね、お聞きなさいよ、迅ちゃん。あんた、金持ちになったんでしょ。持ち運びだつて、重くて不便ですよ。こんなガラクタ道具、じゃまだから、あたしにくれてしまいなさいよ。」

あたしたち貧乏人には、けつこう役に立ちますからね。」

「僕は金持ちじゃないよ。これ売って、その金で……。」

「おやおや、まあまあ、知事様になつても金持ちじゃない？ 現にお妾が三人もいて、お出ましは八人かきのかごで、それでも金持ちじゃない？ フン、だまそうたつて、そうはいきませんよ。」

返事のしようがないので、私は口を閉じたまま立っていた。

「ああ、ああ、金がたまれば財布のひもを締める。財布のひもを締めるからまたたまる……。コンパスは、ふくれつつらで背を向けると、ぶつぶつ言いながら、ゆっくりした足どりで出ていった。行きがけの駄賃に母の手袋をズボンの下へねじ込んで。」

そのあと、近所にいる親戚が何人も訪ねてきた。その応対に追われながら、暇をみて荷ごしらえをした。そんなことで四、五日潰れた。

15

10

5

意 不  
意 服  
意 冷  
意 現  
意 行  
意 ぎ  
意 が  
意 け  
意 の  
意 駄  
意 賃

ある寒い日の午後、私は食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので、振り向いてみた。思わずアツと声が出かかった。急いで立ち上がって迎えた。

来た客は閩土ルントである。ひと目で閩土とわかったものの、その閩土は、私の記憶にある閩土とは似もつかなかった。背丈は倍ほどになり、昔の艶のいい丸顔は、今では黄ばんだ色に変わり、しかも深いしわがたたまれていた。目も、彼の父親がそうであったように、周りが赤く腫れている。私は知っている。海辺で耕作する者は、一日中潮風に吹かれるせいで、よくこうなる。

頭には古ぼけた毛織りの帽子、身には薄手の綿入れ一枚、全身ぶるぶる震えている。紙包みと長いきせるを手に提げている。その手も、私の記憶にある血色のいい、まるまるした手ではなく、太い、節くれだった、しかもひび割れた、松の幹のような手である。

私は感激で胸がいっぱいになり、しかしどう口をきいたものやら思案がつかぬままに、ひと言、

「ああ、閩ちゃん——よく来たね……。」

続いて言いたいことが、あとからあとから、数珠じゆずつなぎになって出かかった。角鶏チアオチ、跳ね魚、貝殻チャイ、猿……だがそれらは、何かでせき止められたように、頭の中を駆けめぐらさず、口からは出なかつた。

彼は突っ立ったままだった。喜びと寂しさの色が顔に現れた。唇が動いたが、声にはならなかつた。最後に、恭うやうやしい態度に変わって、はつきりこう言った。

「旦那様！……。」

15

10

5

類 感激  
意 思案  
意 数珠つなぎ  
意 恭しい

▼ 那 旦 駈

私は身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。私は口がきけなかった。

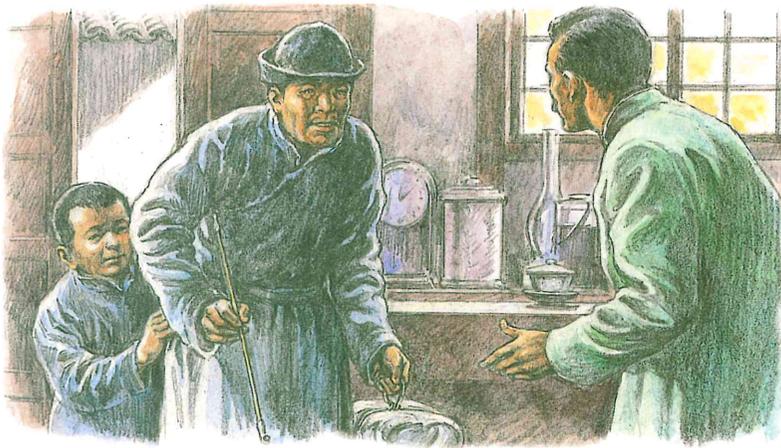
彼は後ろを向いて、「水生、旦那様にお辞儀しな。」と言って、彼の背に隠れていた子どもを前へ出した。これぞまさしく三十年前の閩土であった。いくらか瘦せて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違いはあるけれども。「これが五番めの子でございます。世間へ出さぬものですから、おどおどしておりまして……。」

母と宏児が二階から降りてきた。話し声を聞きつけたのだろう。

「ご隠居様、お手紙は早くにいただきました。全く、うれしくてたまりませんでした、旦那様がお帰りになると聞きました……。」と閩土は言った。

「まあ、なんだってそんな、他人行儀にするんだね。おまえたち、昔は兄弟の仲じゃないか。昔のように、迅ちゃん、でいいんだよ。」と母は、うれしそうに言った。

「めっそうな、ご隠居様、なんとも……とんでもないこととございます。あの頃は子どもで、



意 顔色  
意 おどおど  
意 他人行儀

なんのわきまえもなく……。」そしてまたも水生を前に出してお辞儀させようとしたが、子どもははにかんで、父親の背にしがみついたままだった。

「これが水生？ 五番めだね。知らない人ばかりだから、はにかむのも無理ない。宏児や、あちらで一緒に遊んでおやり。」と母は言った。

言われて宏児は、水生を誘い、水生もうれしそうに、そろって出ていった。母は閨土（ルント）に席を勧めた。彼はしばらくためらったあと、ようやく腰を下ろした。長ぎせるをテーブルに立てかけて、紙包みを差し出した。

「冬場は、ろくなものがございません。少しばかり、青豆の干したのですが、自分とこのですから、どうか旦那様に……。」

私は、暮らし向きについて尋ねた。彼は首を振るばかりだった。

「とてもとても。今では六番めの子も役に立ちますが、それでも追いつけません……世間は物騒だし……どっちを向いても金は取られほうだい、きまりもなにも……作柄もよくございません。作った物を売りに行けば、何度も税金を取られて、元は切れるし、そうかといって売らなければ、腐（くさ）らせるばかりで……。」

首を振りどおしである。顔にはたくさんしわがたたまれていたが、まるで石像のように、そのしわは少しも動かなかった。苦しみを感じはしても、それを言い表すすべがないように、しばらく沈黙し、それからきせるを取り上げて、黙々とたばこをふかした。

母が都合をきくと、家に用が多いから、明日は帰らねばならぬという。それに昼飯もまだと

15

10

5

元が切れる  
売り値が原価よりも安い  
価格になる。

類 すがない

意 黙々

言うので、自分で台所へ行つて、飯をいためて食べるように勧めた。

彼が出ていったあと、母と私とは彼の境遇きやうぐうを思つてため息をついた。子こだくさん、凶きやうざく作、重い税金、兵隊、匪賊ひぞく、役人、地主、みんな寄つてたかつて彼をいじめて、デクノボーみたいな人間にしてしまったのだ。母は、持っていかなぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選ばせよう、と私に言った。

午後、彼は品物を選び出した。長テーブル二個、椅子いす四脚きやく、香炉かうろと燭台しよくたい一組み、大秤おほばかり一本。その他ほかわら灰もみんな欲しいと言つた。(私たちのところでは、炊事さいじの時わらを燃す。その灰は砂地の肥料になる。) 私たちが旅立つ時来て船で運ぶ、と言つた。

夜はまた世間話をした。とりとめのない話ばかりだった。明くる日の朝、彼は水生を連れて帰つていった。

それからまた九日して、私たちの旅立ちの日になった。閩土は朝から来ていた。水生は連れずに、五歳になる女の子に船の番をさせていた。それぞれに一日中忙しくて、もう話をする暇はなかった。客も多かった。見送りに来る者、品物を取りに来る者、見送りながら品物を取りに来る者。夕方になって、私たちが船に乗り込む頃には、この古い家にあつた大小さまざまなガラクタ類は、すっかり片づいていた。

船はひたすら前進した。両岸の緑の山々は、たそがれの中で薄墨色に変わり、次々と船尾に消えた。

私と一緒に窓辺にもたれて、暮れてゆく外の景色を眺めていた宏児が、ふと問いかけた。

▼ 遇

兵隊、匪賊、役人、地主

いづれも、当時の中国で人民の敵とみなされてきた。「匪賊」は、集団で略奪などをする盗賊。

▼ 椅

▼ 香炉

香をたくのに用いる容器。

▼ 炉

▼ 燭台

ろうそくを立てるための台。

▼ 炊

文 ……がたら

意 ひたすら

意 たそがれ

「おじさん、僕たち、いつ帰ってくるの？」

「帰ってくる？ どうしてまた、行きもしないうちに、帰るなんて考えたんだい？」

「だって、水生シユイシヨウが僕に、家へ遊びに来たって。」

大きな黒い目をみはって、彼はじつと考えこんでいた。

私も、私の母も、はっと胸をつかれた。そして話がまた閩土ミントのことに戻った。母はこう語った。例の豆腐屋小町の楊ヤンおばさんは、私の家で片づけが始まってから、毎日必ずやってきたが、おととい、灰の山からわんや皿を十個あまり掘り出した。あれこれ議論の末、それは閩土が埋めておいたにちがいない、灰を運ぶ時、一緒に持ち帰れるから、という結論になった。楊おばさんは、この発見を手柄顔に、「犬じらし」（これは私たちのところで鶏ニワトリを飼うのに使う。木の板に柵を取り付けた道具で、中に食べ物を入れておくと、鶏は首を伸ばしてついばむことができるが、犬にはできないので、見てじれるだけである。）をつかんで飛ぶように走り去った。てん足用の底の高い靴で、よくも思うほど速かったそうだ。

古い家はますます遠くなり、故郷の山や水もますます遠くなる。だが名残惜しい気はしない。自分の周りに目に見えぬ高い壁があつて、その中に自分だけ取り残されたように、気がめいるだけである。西瓜畑スイカの銀の首輪の小英雄エイユウの面影は、もとは鮮明このうえなかつたのが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまらなく悲しい。

母と宏児ホンルとは寝入った。

私も横になって、船の底に水のぶつかる音を聞きながら、今、自分は、自分の道を歩いてい

15

10

5

▼掘

▼鶏

てん足

中国では、昔、女性の足を大きくしないため、幼児の時から布を固く巻きつける習慣があつた。そうしてできた小さい足のこと。

▼雄

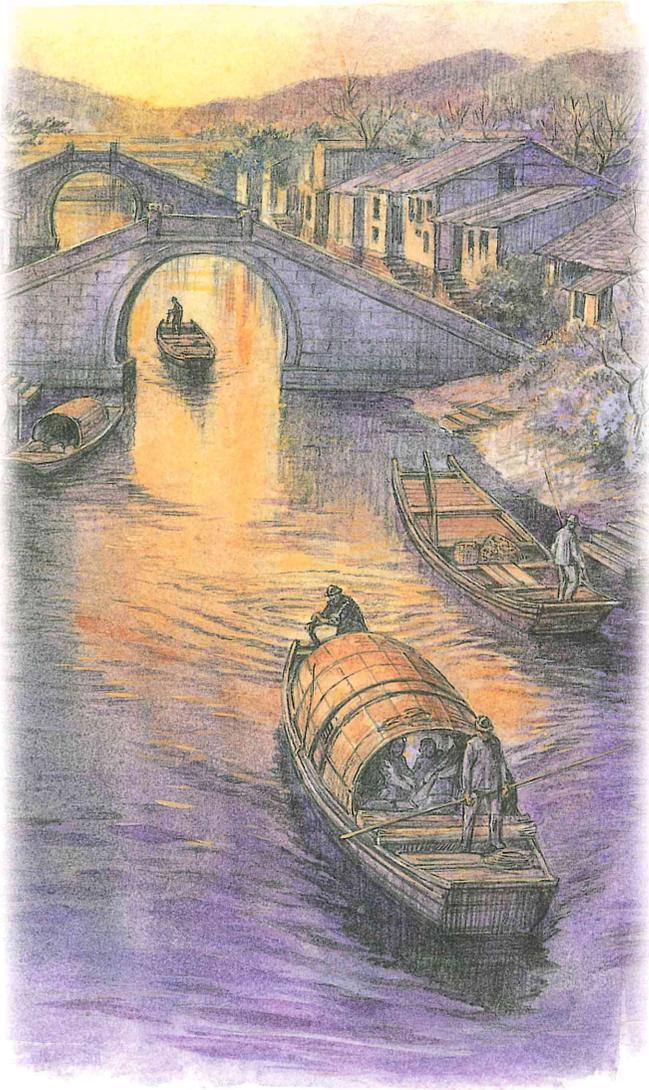
文 走り去る

意 名残惜しい

意 気がめいる

類 英雄

意 鮮明



るとわかった。思えば私と閩土との距離は全く遠くだったが、若い世代は今でも心が通い合い、現に宏児は水生のことを慕っている。せめて彼らだけは、私と違って、互いに隔絶することのないように……とはいっても、彼らが一つ心でいたがために、私のように、無駄の積み重ねで魂をすり減らす生活をともにすることは願わない。また閩土のように、打ちひしがれて心がまひする生活をともにすることも願わない。また他の人のように、やけを起こしてのほうずに走る生活をともにすることも願わない。希望をいえば、彼らは新しい生活をもたなくてはならない。私たちの経験しなかった新しい生活を。

5

類  
希望  
のほうず

希望という考えが浮かんだので、私はどきっとした。たしか閩土（ミントウ）が香炉と燭台（ショクダイ）を所望（ショモウ）した

時、私はあい変わらずの偶像崇拜（オウバウ）だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑ったものだが、今私という希望も、やはり手製の偶像にすぎぬのではないか。ただ彼の望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りにくいだけだ。

まどろみかけた私の目に、海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧（コンペキ）の空には、金色の丸い月がかかっている。思うに希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

## 魯迅「二八八—一九三六」

中国の小説家・詩人。

小説に『狂人日記』『阿Q正伝』、『阿Q正伝』、散文詩集に『野草』がある。



## 竹内好「一九一〇—一九七七」

長野県に生まれた。中国文学者・評論家。

評論に『魯迅』『魯迅雑記』『方法としてのアジア』、訳書に『魯迅文集』などがある。



《出典》『魯迅文集 第一巻』によった。

▼崇

意 所望

意 偶像崇拜

# 千 みちしるべ

## 内容を捉えよう

- 1 作品の構成について捉えよう。
- 2 五つの場面に分け、小見出しをつけよう。
- 3 できごとを時間の順序に従って整理しよう。

## 読み深めよう

- 1 「私」の記憶の中にある故郷と、現在の故郷の風景の様子を比べよう。
- 2 「私」と「楊おばさん」について考えよう。
- 3 「閩土」と「楊おばさん」について考えよう。
- 4 「私」に対する二人の気持ちを想像し、過去と現在に分けてまとめよう。
- 5 過去と現在の二人のことを、「私」はどのように捉えているか、理由とあわせて考えよう。

## 自分の考えを伝え合おう

- 4 「思うに希望とは、……歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」(P 196 L 6～8) について、次のことを考えよう。

- 1 「閩土」と「私」の「希望」はどのように異なるのか、考えよう。

- 2 「私」の捉えている「地上の道」とはどのようなものか、考えよう。

- 5 この作品に対する批評文を書き、交流しよう。

批評とは、物事や作品の特性や価値などについて、論じたり評価したりすることである。この作品の特性や価値が表れていると思う観点を示し、他者に伝わるように書いてみよう。

### 参考

#### 観点の例

- ・ 題名 ・ 風景描写に映し出される心情
- ・ 登場人物の言動 ・ 物語の構成と展開
- ・ 語り手の視点や語り方 ・ 表現の効果 など

↓ P 105 へ

### 言葉・情報

#### ● 言葉と表現

「私の覚えている故郷は、……決して楽しいものではないのだから。」(P 182 L 7～P 183 L 2) について、「もつとずっとよかった」「しかし」「やはり」「そこで」「なぜなら」などの言葉に着目して、「私」の故郷に対する思いの変化を読み取ろう。



□ 作品を理解するために必要な語句の量を増やし、意識的に使用して語彙を豊かにしているか。

□ 語る「私」と語られる「私」に着目しながら読み、人間や社会、自然についての自分の意見をもっているか。

□ この作品に対する批評文を書いて交流したことで、作品への評価がどのように深まったり広がったりしたのか、考えよう。

この教材で学ぶ漢字

184 雇 コ やとう 雇用 雇い主	184 坊 ボウ ハネツ 赤ん坊 坊ちゃん	184 股 コ また 股関節 大腿で歩く	184 紺 コン 紺色	183 閑 カン 閑散	183 茎 ケイ くき 地下茎 花の茎
187 塀 ヘイ 板塀	187 跳 チヨウ ハネル 跳馬 跳ね馬 跳び箱	186 渴 カク かわく 喉が渴く	186 殻 カク から 地殻 貝殻	185 帽 ボウ 帽子	185 艶 ツヤ 艶消し
190 旦 タン 旦那	190 駆 ク かける 駆使 駆け回る	188 繁 ハン 繁栄	188 腐 フ くさる 豆腐 食品が腐る	188 脚 キヤク あし 脚色 前脚	187 贈 ソウ おく 寄贈 贈り物 贈答

新出音訓

184 脳裏(リ)★

185 結わえる(ゆゝわえる)

.....

196 所望(モウ)★

.....

194 名残(なごり)

「付表」の語

193 椅 イ 椅子	193 凶 キョウ 凶悪	193 遇 グウ 待遇	190 那 ナ 刹那
194 鶏 ケイ にわとり 鶏卵 鶏小屋	194 掘 クツ ほる 芋掘り	193 炊 スイ たく 自炊 水炊き	193 炉 ロ 暖炉
		196 崇 スウ 崇高	194 雄 オウ おす 雄犬 雄牛 英雄